

「不安」が収まらないレプリコンワクチン なぜ払拭（ふっしょく）できないの

2024年11月18日 谷口恭・谷口医院院長毎日新聞

新型コロナウイルス（以下、単に「コロナ」）の8回目のワクチン接種が10月1日に始まり1カ月半が経過しました。厚労省によると、ワクチン供給量は3224万回分で、そのうち427万回分がMeiji Seika ファルマ株式会社（以下、「Meiji」）の「レプリコンワクチン」です。9月9日に公開した連載「不安だらけの新型コロナ『レプリコンワクチン』」で述べたように、この新しいワクチンの安全性を懸念する声は、決して小さくありません。その後、レプリコンワクチンについていくつかの物議を醸す出来事が起こり、安全性を主張する学会の声明が発表されたものの世間の混乱は一向に収まらず、ますます医療不信が進んでいるように見えます。そこで今回は、9月以降のレプリコンワクチンに関する出来事をまとめ、コロナワクチンの理想のあり方について私見を述べてみたいと思います。

目まぐるしい動き

9月に公開した連載では、レプリコンワクチンの特徴を簡単に紹介し、接種に反対する医療系の学会が登場したことや接種者の来院を拒否する医療機関が現れたこと、そして、安全性を疑問視する小さくない声があるのだから「政府や専門家は今すぐになんらかの見解を発表すべきだ」という私見を述べました。その後の動向をまとめてみましょう。

9月18日 Meijiの現役の社員による書籍「私たちは売りたいくない！ “危ないワクチン”販売を命じられた製薬会社現役社員の慟哭」が発売され話題になった。Meijiの社員が自社のレプリコンワクチンを「売りたいくない」と述べたとして物議を醸した



毎日新聞朝刊に掲載されたMeiji Seika ファルマ社の全面広告 = 東京都内で2024年1月15日午前9時49分、伊藤奈々恵撮影

9月28日 東京・有明の東京臨海広域防災公園でコロナワクチンに反対するデモ集会が開かれた。主催団体によると、約3万人が参加した

10月1日 8回目となるコロナワクチン接種が開始され、レプリコンワクチンがラインアップに加えられた

10月9日 Meijiは、日本看護倫理学会が8月に発表したレプリコンワクチンに反対する緊急声明に対し、「事実誤認および科学的知見に基づかない」と反論する声明を発表した

10月16日 Meijiは、レプリコンワクチンに対して、SNS（ネット交流サービス）などで「科学的根拠のない話やデマの投稿が相次いでいる」として注意喚起する全面広告を、全国紙の朝刊に掲載した

10月17日 日本感染症学会、日本呼吸器学会、日本ワクチン学会が共同で「2024年度の新型コロナウイルス定期接種に関する見解」を発表し、この中でレプリコンワクチンが安全であることを訴えた

10月31日 Meijiが立憲民主党の原口一博衆院議員を「名誉棄損で提訴を検討し、準備を進めている」との公式見解を発表。Meijiによると、原口議員はSNSなどで「(Meijiは)731部隊」「(レプリコンワクチンは)生物兵器」で「3発目の原爆」などと主張しているとのこと

拭えない不信感

9月の記事で取り上げた「日本看護倫理学会の緊急声明」や「一部の医療機関の接種者の診察拒否」も異常な事態ですが、レプリコンワクチンのメーカーであるMeijiの社員が自社製品を「売りたいくない」と公表したのにもわかには信じがたい、尋常でない出来事です。Meijiは自社製品の悪口を言う国会議員を提訴することよりも、同社の社員が自社製品を「売りたいくない」などと公表したことについての釈明を先にすべきではないでしょうか。

注) 同社は編集部の取材に対し、この本について「仮に本書籍に弊社の社員がかかわっているとすればきわめて大きな問題ですので、社内外で調査を行っている最中です」とコメントしている。

法律により「特定の医薬品を示して一般市民向けに情報提供することは禁じられている」そうですが、せめてこれだけの混乱を招いていることに対し、国民に対し何らかの釈明をする義務があると私は考えます。

まっとうな対応をしていると思わ

れるのは、レプリコンワクチンが安全であることを訴えた三つの学会です。Meiji のレプリコンワクチンは、正当な手続きを踏んで臨床試験が実施され、厚労省が認可したワクチンです。データの捏造（ねつぞう）や不正行為があったのならともかく、きちんとした根拠を示さずに一方的に否定される筋合いはありません。よって、不信感が大きくなっていることを受けて安全性を主張した三つの学会の行動はあるべき姿です。

しかし、日本看護倫理学会の緊急声明や Meiji の社員の「売りたいくない」を表明した書籍、あるいは原口議員の SNS での発言などに比べ、これら学会の見解の発表はメディアで取り上げられはしたものの、反対意見の盛り上がりには比べればあまり話題になっていないように見受けられます。

当院に寄せられるコロナワクチンに関する問い合わせを振り返っても、ほとんどの人が「レプリコンだけはイヤ」と言います。最近では「インフルエンザワクチンにはレプリコンは入っていないですよ」などという質問も相次ぎ驚かされています。

診療所で取り扱えない理由

The Lancet に最近発表された論文によると、Meiji のレプリコンワクチンの安全性は従来



の mRNA 型ワクチンと同様で、中和抗体の値は従来の mRNA 型ワクチンよりも長期間高い数値を維持しているとされています。そういったデータから理想のワクチンを検討すれば「最も推薦されるべきコロナワクチン」に位置づけられてもおかしくありません（ただし、抗体価が長期間高いというだけでは実際にどの程度、従来の mRNA ワクチンよりも有効なのかは分かりません。例えば「1

回接種で、従来の mRNA ワクチンは半年有効、レプリコンなら

1 年有効」などと言えるわけではありません）。しかし、レプリコンワクチンはほとんどの診療所/クリニックでは接種できません。これは診療所の医師が反対しているからではなく、1 バイアルが 16 人用だからです。16 人を同時に集めて接種できる診療所はそう多くはありません。当院もレプリコンワクチンは扱わずファイザー製の従来の mRNA ワクチンと武田薬品工業の組み換えたんぱくワクチンのいずれかを接種しています。

私自身はレプリコンワクチンに対して、現時点では賛成でも反対でもありませんが、Meiji や政府は「誰を対象と考えているのか、どこで接種すべきなのか」を明らかにする義務があると考えています。

打つか否か、答えは人それぞれ

世間の印象とは異なり、コロナは依然楽観できない感染症です。「ただの風邪」とする声が

増えていますが、重症化リスクを有する人にとってはコロナは依然「死に至る病」であり、死亡者数は今もインフルエンザの約 15 倍と報道されています。ならば、医療者は引き続きコロナの危険性を訴え、ワクチン接種を呼び掛けるべきではないでしょうか。

ではワクチンを接種すべきなのは誰でしょう。まず、定期接種の対象となっている 65 歳以上または 60～64 歳のハイリスク者は検討すべきです。ただし、当院でいえば、65 歳以上の健常者のなかにはワクチンを打たない選択をする人も大勢います。他方、60 歳未満でも、重症化リスクがある人のなかには高い費用を負担して接種する人もいます。また、自身は若くて元気でも、家族や身近な人が高齢者や重症化リスクがあるからという理由で接種されている人もいます。

私が本連載や講演などで繰り返し主張しているのは「ワクチンは“主語”を誰にするかによって結論が異なる」というものです。「コロナワクチンによって社会が利益を得るか」と問われれば答えは「イエス」です。たしかにオミクロン株以降はワクチンの有益の度合いが低下していますが、それでも重症化リスクがある人にとっては貴重な“武器”であり、私の実臨床の実感としてもワクチンを接種しているハイリスク者は軽症で済んでいる印象があります。

ですが、“主語”を「あなた」とした場合、つまり「あなたが利益を得るか」と考えたときには結論が大きく異なります。コロナワクチンが他のワクチンに比べて副作用のリスクが大幅に高いのは間違いありません。コロナワクチンが登場したときから私が繰り返し主張しているように（「新型コロナ ワクチン接種はよく考えて」）、**コロナワクチンは「打ってもリスク、打たなくても（重症化リスクがある人には）リスク」と考えるべきです。**

ではどうすればいいか。月並みな答えになりますが、「高齢者または重症化リスクがある人はかかりつけ医に相談する」以外にありません。我々かかりつけ医の立場の医者（の多く）は、一律に「コロナワクチンは接種すべき/すべきでない」などと考えているわけではありません。その人の背景をじゅうぶんに考慮した上で接種すべきか否かを検討し、接種する場合、mRNA ワクチンがいいのか、あるいは組み換えたんぱくワクチンがいいのかを決定します。